

JSOA Traveling Fellow 報告記

- SIAGASCOT 2025 -

東北労災病院 井樋 栄二



この度、JSOA-SIAGASCOT 研修旅行に、2名のフェロー（橘優太先生、下園由泰先生）の引率係（Godfather）として参加する機会をいただきましたので、その内容についてご報告いたします。

1. ミラノ

日本からの直行便はありませんので、フランクフルト乗り換え便を使い、羽田を出発してから18時間後にミラノ空港に到着しました。夜9時にミラノ空港に到着、ミラノ大学関連病院 Gaetano Pini 病院の Mattia Radici 先生が迎えに来てくれ、それからホテルにチェックインかと思いきやそのままレストランへ直行。ミラノでも有名なピザ・レストランに連れて行ってもらいました。そこでミラノのホストである Pietro Randelli 教授と合流し、巨大なピザをいただきました（図1）。



図1 左から Mattia Radici 先生、Pietro Randelli 教授、筆者、橘優太先生、下園由泰先生

翌朝は Gaetano Pini 病院見学をしました。実は1994年に日本肩関節学会とヨーロッパ肩関節学会の間で研修旅行が始まり、その第1回生として私がヨーロッパ6カ国を訪問しました。そのときイタリアで訪問したのがこの Gaetano Pini 病院で、そのときの整形外科教授が現在の Pietro Randelli 教授の伯父にあたる Mario Randelli 教授でした（図2）。当時医学生だった Pietro が今や主任教授、当時大学の助手だった私はすでに名誉教授、30年の歳月を実感した次第です。

病院では教授執刀の鏡視下腱板修復術や人工肩関節置換術、また日本では行われていないバルーン形成術もみせてもらいました。術式や適応などは日本とほとんど変わりませんが、術後の入院期間はほとんどの手術が1泊2日で行われている点が日本とは大きく異なります。

午後は事前をお願いしていた聖サンプリチャーノ大聖堂のオルガンを弾かせていただきました。素晴らしい音が聖堂内に響き渡りました（図3）。



図2 1994年に第1回 JSS-SECEC traveling fellow として Gaetano Pini 病院を訪問したときの写真 右端が Mario Randelli 教授



図3 聖サンブリチャーノ大聖堂のオルガン



図4 Ossobuco (オッソ・ブーコ) 仔牛の骨髄料理

夜はミラノでもっとも有名な料理 Ossobuco (osso 骨の buco 穴という意味で骨髄のこと、仔牛の脛肉と周囲の肉を輪切りにし煮込んだ料理) をご馳走になりました(図4)。

最終日は Gaetano Pini 病院の講堂で研究会が開かれ、日本側とミラノ大学側から研究発表が行われました。私は肩関節外科医としての35年の歩みについて、橘優太先生は膝関節の後十字靭帯再建術について、下園由泰先生は NanoScope と言われる細い足関節鏡について講演を行いました。100名以上の先生方が集まって活発な討論が行われました。

2. トリノ

トリノはミラノから高速鉄道 Italo で1時間の距離にあります。ミラノとともにイタリアの最北端に位置しますので、気候はまだ冬、厚手のコートが欲しいくらいでした。

ここでは Maurizioano 病院を訪問しましたが、この病院は1880年頃に建てられた建物で、立派な会議室にはベストで多くの死者が出たときの絵、国王戴冠の絵などが壁一面に飾られており、美術館のようでした(図5)。

ここでも手術見学や研究会が開催されました。病院の建物自体は古いのですが、手術室には人工関節支援ロボットなど最新の機器が揃っていました。

図5 美術館のような Maurizioano 病院の会議室



トリノでは Roberto Rossi 教授が手配して下さった聖母教会でオルガンを弾かせてもらいました(図6、7)。

3. ローマ

次にイタリアの中央部に位置する首都ローマを訪問しました。北端のトリノからは高速鉄道でも5時間くらいかかりました。ローマでは BioMedico 大学病院での手術見学と研究発表がありました。また、Guiseppe Longo 教授から医学部学生に講義をしてもらいたいと言われ、急遽スライドを準備して3年生に講義をしました。Longo 教授と手分けして講義をし、その後、診察法の実技指導を行いました。学生同士が診察手技をお互いに行う実技です。学生が非常に熱心に講義を聞いており、多くの質問もあり、とても楽しく講義をすることができました。学生はみんなイタリア人かと思っていたのですが、学生に聞いたら、その学生はイスラエルから来ており、学生の3割くらいは海外から来ているとのことでした。講義と質疑応答はすべて英語でしたが全く問題なく、国際化が進んでいると感じました(図8)。

また、以前から親しくしている Giovanni Di Giacomo 先生の Concordia 病院も訪問し、彼の手術もみせてもらいました。彼は今年の SIAGASCOT 学会の会長を務めています。髄内釘抜去後の反転型人工肩関節など難しい手術を手

図6 聖母教会のオルガン





図7 オルガン演奏台 オルガン演奏に立ち会ってくれた聖母教会オルガニストのStefanoと



図8 学生講義 術衣を着ているのがLongo教授。学生には隣同士で診察法の実技を行なってもらいました。



図9 聖マリア教会内部



図10 バッハのコラール演奏中



図11 名誉会員賞表彰式 左は前理事長のElizaveta Kon教授、右は新理事長のMario Ronga教授

際よく行なっているのが印象的でした。ローマでもGiovanniが手配してくれた聖マリア教会のオルガンを弾かせてもらいました(図9、10)。

4. ナポリ

訪問地の最後はナポリです。ここでSIAGASCOTの学術集会が二日半の日程で開催され、JSOAセッションでは私たち3名が発表しました。また、光栄なことに私はSIAGASCOTの名誉会員に推薦していただきました(図11)。

ナポリから電車で30分くらいのところにポンペイ遺跡があります。ベスビオ火山の大噴火でポンペイの町は一瞬にして火山灰に埋もれ、その当時の生活がそのまま残されています。また、数多くの遺体(火山灰に埋もれた遺体が消滅した後にできた空洞に石膏を流して作ったもの)が安置されていました(図12)。

今回の研修旅行では、日本とイタリアの両学会の深い繋がりを実感しましたし、多くの友人と会い、また新しい友人を作ることもできました。来年はイタリアから日本に彼らが来ますので、大いに歓迎したいと思います。情報がネットで自由に得られる時代、何かを学ぶというよりは、

対面で議論をしたり談笑したりと、人的な交流がこのプログラムのもっとも重要な目的であることを再確認した次第です。

最後に、送り出して下さったJSOAの関係者の皆様、受け入れて下さったSIAGASCOTの関係者の皆様に、2人のフェローとともに厚く御礼申し上げます。

図12 ポンペイ遺跡の遺体





本編では研修に関する内容を中心にお伝えしましたが、このフェローシップでは、学びと同じくらい忘れがたい出来事を数多く経験しました。

まずミラノ到着初日に訪れたレストランで、イタリアサッカー界の伝説的選手、パオロ・マルディーニ氏と偶然遭遇するという奇跡がありました。声をかけたところ快く一緒に写真を撮らせていただきました。スーパースターとの思わぬ出会いに大興奮し、初日から印象的なスタートとなりました。

一方で、予想外のトラブルにも遭遇しました。ローマ市内で電車に乗った際、少女3人組による巧妙なスリに遭いました。私は

盗難防止用のポーチを身につけていましたが、乗車するとすぐに彼女たちが話しかけてきて、上方の路線図を指さしながら「どこに行くのか」と尋ねるような素振りを見せました。気を取られているうちに、電車のドアが閉まる直前に逃げ去られ、気づいたときにはポーチのチャックが開けられ、現金が取られていました。幸いパスポートやカード類は奥のポケットにボタンとチャックで二重に保管していたため無事でした。被害は小額でしたが、気を引き締める出来事でした。さらに、ナポリのSIAGASCOT学会に参加したミラノのフェローも、駅構内でスマートフォンを盗まれる被害に遭っていました。今後フェローで行かれる方は、十分ご注意ください。

今回のフェローシップでは、井樋栄二先生と2週間一緒にできたことも非常に貴重な経験となりました。先生は各施設での講演において、ご自身のキャリアや Shoulderology (肩学) の概念、そして日々の診療で「なぜ」を問い続ける姿勢の大切さを熱く語られ、多くのイタリアの医師たちに強い印象を残しておられました。私自身も深く感銘を受け、帰国後すぐに先生の著書『Shoulderology (肩学)』を購入し拝読しました。肩を専門としない私にとっても、診療への向き合い方を見直す貴重なきっかけとなりました。また、橘優太先生とは旅の全行程を共にし、移動中も含めて多くの学びや刺激をいただきました。常に前向きな姿勢と探究心を持ち、積極的に学ぶ姿が印象的でした。

今回のフェローシップは、学術的な刺激に加え、文化的な感動や人との深い交流に満ちたかけがえのない2週間でした。先代の先生方が築き上げてきたこのような素晴らしいフェローシップが今後も発展し、多くの若手医師にとって刺激となる機会が継続していくことを心より願っております。



SIAGASCOT学会のトラベリングフェローセッション。質問を受ける橘先生と私



トリノでの Scientific session 後の集合写真



初日にベルガモまで見に行ったセリエAの試合（インテル対アタランタ）



学会の Congress dinner で急遽の依頼にも関わらず大勢の前でピアノ演奏を披露する井樋先生



イタリアサッカー界のレジェンド、パオロ・マルディーニ氏との写真



井樋先生に憧れて（弾く真似です）



増刊号版では、JSOA-SIAGASCOT traveling fellow のうち、手術見学以外のことをご紹介します。それでもまだ書ききれないくらいエピソードがありますので、興味のある先生はお気軽に直接お声がけください。

・Scientific session：各訪問先で開かれ、プレゼンする機会をいただきました。特にミラノでは再生医療で超有名な Elizaveta Kon 先生も参加されて 100 人近い人が集まり（図 1）、井樋先生の Shoulderology の講演後にスタンディングオベーションが起こりました。その内容において、「Why?」と常々疑問を持ち続け、それをどのようにして解明・改善するかを追求することがいかに大事であるかを若い先生向けに強調されているのが印象的で、私自身も大変感銘を受けました。帰国後すぐに「Shoulderology（肩学）」を購入し、拝読しております。また、各訪問先のレジデン

トの勉強熱心さと知識量に驚かされました。

・院外活動：トリノではユベントススタジアム、ローマではバチカン市国と中田英寿が活躍した AS ローマのトレーニングセンター（図 2）など様々なツアーを企画してもらいました。ミラノではナイトライフがご専門？のレジデントに朝 2 時までクラブに連れて行ってもらいました。また、少しでも前入りして Rugby six nations のイタリア対アイルランドの試合を見に行ったり、下園先生とセリエ A サッカーのベルガモ対インテルの試合を見に行ったりもしました。

・井樋先生と下園先生：海外留学経験を持たない私にとって、肩関節の世界的権威である井樋先生、米国で実臨床されていた下園先生と一緒に旅ができて本当に幸運でした。井樋先生には、上記のご講演のみならず、各都市で教会を訪問した際に、おそらくオルガニストや関係者以外は立ち入りできないエリアまで私も入らせていただき、パイプオルガンの生演奏を真横で聞かせていただきました（図 3）。下園先生とは HSS や NYU で過ごしてきた日々のことを教えてもらったり、並外れたサッカーの造詣をお持ちで現地人と熱いサッカー談義を繰り広げたりするほか、実は大の甘党である（図 4）ことを知ったりするくらい長い時間を一緒に過ごせたことは一生の財産です。

・最後に

私にとって初めてのフェローシップでしたが、学術的のみならず、イタリア文化を知り、数多くのイタリアの先生方と交流して知り合いになれるという、本当に刺激に満ちたかけがえのない 2 週間でした。先輩方が楽いてくださったこの素晴らしいフェローシップが若手の先生によってさらに継続発展できるよう、私自身も尽力したいと思います。若手の先生方へ、時間は有限ですので是非とも積極的にこのチャンスにトライしてください！！



図 1 ミラノの Scientific session 後の集合写真 会場は満員御礼で立ち見が出るほどでした



図 2 AS ローマのクラブハウス内のプレス席にて 偶然ですが名古屋グランパスのジュニアが合宿しにきていました



図 3 ミラノの教会にてパイプオルガンを演奏する井樋先生



図 4 手術の合間にてスイーツを食べる下園先生